



全道展交流紙

2015.8

創刊 50 号記念

No.50

全道展 ^{いま} 現在、そしてこれから

新事務局に想う

—70 周年を通過点として—

事務局長 川本ヤスヒロ

全道展は今年 70 周年を迎え、6 月の記念展は終了した。10 月 31 日から北海道立近代美術館で開催される「全道展 70 周年記念企画展〈会員、会友展〉」のタイトルは既に周知のとおり「70 年—新生する全道展—」である。これまでの長い歴史の上に、今日から新たな 1 ページを、との強い思いが込められている。作品は部門もテーマも自由で、全道展らしく内容のある充実した展覧会になるものと期待している。目前に迫った企画展は事務局及び実行委員、そして皆さんが一体となって着々と準備が進められて来た。何とか実り多い展覧会にしたい。

さて、昨年 9 月の拡大会務委員会ならびに総会を経て、事務局の顔ぶれが替わったことをご報告させて頂く。会計部長が山本恒二会員より吉川勝久会員へ、そして梅津薫前事務局長から私が重責のバトンを引き継がせて頂いた。前任者のご尽力に感謝を申し上げ、今後 3 年間の大役に全力で取り組んで行きたいと思っている。

ここで全道展と私の繋がりに少し触れておくと、初入選は 1968 年（第 23 回展）で、当時は創立会員の国松登先生を始め錚々たる人達がいた。岩船修三、高橋北修、小川原脩、池谷寅一、菊地精二、一木万寿三、田中忠雄、西村喜久子、橋本三郎、松島正人、山内壮夫、川上澄生、小川マリ先生達である。会場の丸井デパートの場内は熱気が溢れ、十代の私の心はドキドキした。それ程刺激的で魅力のある作品が多かったのである。絵画の入選率も低く、今の 220 点の入選数と比べ 110 点程度で非常に厳選であった。



50 年、釧路市生まれ。68 年、17 歳で道展・全道展独立展初入選。88 年、全道展会員推挙。現在、北海道専任講師で美術部顧問。石狩美術協会・全道美術協会・日本美術家連盟会員（石狩市在住）

全道展の 70 年という長い歴史の根幹には、上述の創立会員達の美術文化への貢献に対する高い精神性と誇り、そして情熱があった。私達は時々、全道展の原点を思い返す必要があると思う。その意味でも過去 10 年の節目ごとに開催した記念展の行事の一環として、座談会なども実施してきた。50 周年記念展以来の座談会が昨年

11 月にあり私も参画したが、問題提起を含め本質に迫る貴重な意見を頂き、大変有意義な会となった。

全道展の活動は本展や記念展ばかりではない。小規模ながら存在感のある「新鋭展」もその一つだ。昨年は第 4 回展が開かれた。作品レベルも高くよい展覧会になった。また北海道新聞社主催「学生美術全道展」の審査に関わることで、私達は若者達の感性と創作エネルギーの一端を知り、時代と向き合う経験を積んできた。

数年前から実施している会員によるミニ講座に熱心に耳を傾け、自作の講評を仰ぐ姿から、私自身もこの学生全道展の出身者であったことを思い出すのだ。今年 57 回展を迎える重要な公募展として、今後とも主催者との連携を密に協力体制で推めて行きたい。深謝に堪えないことに、企画展のようなイベントの有無に関わらず、北海道新聞社、道新文化事業社等、関係者には様々な場面でご支援、ご協力を頂いてきた。

北海道の地に「全道展の基礎」を築かれた多くの先輩達に敬意を表し、続く私達もまた互いに切磋琢磨を怠らず、全道展のため力を尽くして行きたいと思う。

特 集

2015 年
6 月 10 日～21 日

70 周年記念全道展

初出品での入賞の高校生や大学生。今年から新設された八木賞も 20 代の若者が射止めた。絵画、版画、彫刻、工芸の 4 部門に 501 点の応募があり入選が 204 点、30 点が入賞した。各部門の審査委員長の総評と、喜びの皆さんの作品にかけける思いなどを寄せていただいた。

総合審査委員長
絵画部門審査委員長

輪島 進一

東京の美術評論家が面白い考察をしたことがあった。東京で開催される公募展で、その団体の性格が判断される一つの基準として、人間をテーマにしている作品が圧倒的に多い会とそうでない会があって、会の目指す方向性が異なっているというのだ。もちろん肖像画的な人物画は論外で、人間の内面や心をテーマにしているか否かと云うこと。前者は「個」が重要で、出品者は個人主義的であるのに対し、後者は「組織」を大切にし、ヒエラルヒー的である、と。人間の本性を突く社会心理学的考察と思った。どちらも人間社会に混然しているものだが、云うまでもなく全道展は、前者に属した人間が多く集まっている。個を大切にする者は、とにかく自分の内面や心の有り様を第一に優先し、ボスのいない集団を望む傾向にある。審査となれば議論白熱。またそうしなければ全道展の意味がない。全道展は、つくづく表現欲の強い人間の集団だと思う。欲深い私たちだから、決して到達し得ない理想的な世界を心のどこかに抱えていてそこを目指しながら右往左往して表現し、失敗し、また続ける。その目指す理想的な世界をプラトンのアイデアだとすれば、パスカルも似たようなことを云っている。人間を虚無と無限の中間者と位置づけ、両極にたどり着けなく永遠の絶望の中で定めなく迷う存在だと。私たち全道展の出品者が表現し創作する意義はまさにここにある。自分の心の中をとことん知りたい、理想とする世界を追い求めたい、欠けている何かを埋めたい…。動機は明確。当然制作が始まると自己の作品と心の格闘が始まる。不安感や迷い、ちぐはぐなアンバランスやグロテスクな表現や稚拙さも登場してくる。そこが全道展の良さ。人間が人間としての本性を失わない限り、全道展は不滅だ。優れた新人も絶えず登場してくる、と確信する。

そのような視点で、会場を見渡せば、十何年、二十何年と出している中堅の会友の作品にそれが多く見いだされる。会員の助言を受け入れたい、しかし頑として曲げたくない自分もいる。それは己の作品を仕上げるにおいて実はとても大事なことだ。どうかどうか意地を通して今のカベを越えていってもらいたい。会員は会員で、絵の様式の深化と共にぶち当たる大きなカベ、「自己模倣のジレンマ」とマンネリとの戦いが始まる。審査する会員も実は苦しんでいる。一番つまらないのは、ああすればこうなる、こうすればああなるという「予定調和」的な作風だけは避けよう。

一般・会友・会員の区別なく、共に自分のカベを乗り越える勇気を持って、頑張っていこうではないか！



版画部門審査委員長

関川 敦子

今年の全道展は第 70 回記念展ということもあり、版画部門も期待を持って審査が始まった。

会友の搬入点数は 38 点。近年、会友では個々の事情から退会をされる方や不出品が続いている方もあり、版画部としては非常に残念に感じているが、一方で意欲的に制作に取り組む姿勢が感じられる作品が出品されることは、これからの版画部の発展にとって大変楽しみなことでもある。

新会員の大澤あい子さんの木版「雪だより」は、雪景色でありながら、どこか温かみが感じられ、自然の力強さが伝わる作品である。また、会友賞の坂みち代さんの銅版「横断歩道のむこう…」は、高度なテクニックを用い、逆光のコントラストをとらえた様子が作品にドラマチックな印象を与えている。

一般の搬入点数は 74 点。木版と銅版の出品が大半を占め、全体の印象としては保守的な作品が多かったように思われる。70 周年記念賞、協会賞、道新賞の上位三賞を版画部として出せなかったことは少々物足りなさを感じた。

そんな中で今回から若い世代の作家に贈られる八木賞受賞の松浦進さんのシルクスクリーン「I wish they had been ill」は圧倒的な強い個性を放っていて、これからの版画部に新しい風を吹き込んでくれそうな作品であった。

佐藤麗子さんの銅版「夏木立」、三浦正志さんの木版「月下の夢幻」も安定した力量の作品だと認められ今回の会友推薦となった。

一般の出品の中には、初出品や若い世代からの出品もあり、今後が大いに楽しみである。是非、続けて出品していただきたい。

今回の審査では、作者の意図がわからない複数点の作品の出品があったことや額装に不備がある作品があったことが問題となった。公募展へ出品するための基本的なことが理解できていないということは残念である。

版画は版種も多様で、制作するうえでそれぞれ専門的な知識や技術が必要となってくる。審査する立場である会員も自らの版種のみならず広い知識を持って審査に臨めるよう心がけていきたい。

作品を制作するものは皆、新しいものに対する挑戦者だということを忘れずに取り組んでいきたいと思う。

70 回記念展という節目。札幌の空は重く小雨が降る肌寒い日だった。その審査初日極めて緊張しつつ第2 室に入る。目の前に今回記念賞を受賞した「深呼吸」があった。技量の高さはもとより、迫力ある造形は心臓の拍動とともに大動脈から全身の毛細血管へと至る血流の力強い生命力を感じさせる。題、造形ともに想像と熟慮をきそう。久々に彫刻部から大きな賞への候補が挙がった。新たな風を予感させる。佳作賞受賞の乾漆作品。両腕を後頭部に組み上げた伸びやかな姿勢はなめらかな曲線に量感を伴い豊かな女性立像として確かな存在感を放つ。菩薩を思わせる。両者とも審査の意見は大きく割れることなく決まった。

ここ数年出品者の減少が危惧される。今回展もその数は少ない。しかしながら、多くの人々が制作だけで生きているわけではなく、それぞれの背景を抱えながら、寸分の時間を見いだしては制作を積み重ねているのだと推しはかる。そうして練り上げられた一つひとつの作品を前に、作家の誠実な姿が浮かび上がってくる。頭が下がる。一方、残念ながら選に至ることのできなかった作品もあった。議論が重ねられた。何度も見詰めなおした。厳選となった。いずれにしても今後も共に、ものづくりとして互いに刺激し合い人間性と技量を高めていければと願わずにはいられなかった。

会友賞、新会員候補も挙がった。高い技量と造形で有りながら意見がわれ、候補並びに推挙に至ることはなかった。しかし、私たち会員を含め、より精神性の高い確かな技量に基づいた魅力ある作品を求め続けること。出品者の減少が懸念される中そのことこそが、やがてくる75 回展、80 回展へとつなげる原動力となるに違いない。自分はどこからやってきて何を見詰め、何を思い何処へ向かおうとしているのか、自己の内なる宇宙の旅をさらに続けようと全道展に育てられた自らの研鑽を深く心に刻む。

出品者の皆様、感動を本当にありがとうございました。



工芸部門では3 年程前より、出展数が減少傾向にありました。特に、陶芸作品の割合が激減し、手工芸的作品の増加傾向が顕著である点を審査員一同懸念しておりましたが、さすがに今年度出展数16 という事実は衝撃的でした。ただ、突出した作品はないものの、完成度の高い、一定水準に達したもののみが出展されたという点では近年、稀にみる快挙でした。又出展数が少ない分、各部門の審査担当者同士、じっくりと様々な角度から制作工程や作者の意図等推察し、話し合う事ができたとも思っております。

審査の結果、入選は12 点。一般部門では奨励賞3 点、会友部門では会友賞1 点を選出致しました。

奨励賞「欲望」

阿部綾子さんの作品は、独特のパーツを組み合わせ、自分の世界を追求した創意溢れる意欲作。彩色、形状等来年以降の展開が大いに楽しみです。

奨励賞「郷愁」

小杉教一さんの作品は、中央の朱の色がまず目をひき、斬新なデザインが魅力的です。漆の力で、全道展に新風を巻き起こして下さる可能性を感じました。

奨励賞「藍色のタペストリー」

宮本瑠美子さんの織作品は、草木染めの温かき、又前面に掛けられたオシャレな布との対比が素晴らしい。

会友賞「浪漫」

堀田佳代さんの作品は、小品ながら凛とした佇まい。すっきりとした、かき割りの模様に、独自さが加わると更に作品に深みが出てくると思います。

最近の傾向として1～2 年以内に入選、又は入賞し将来を嘱望された方達が、次年度以降、出展を止めてしまうケースが多々見られます。今回入選、入賞された方達には今後も継続して出展し、お互い切磋琢磨していかれる事を大いに期待致します。

“継続は力なり”



喜びを糧に新たな挑戦を



各賞受賞、会員推挙の皆さん — 6月13日(土)全日空ホテル—

絵画部門

70周年記念賞

モリケンイチ=札幌市

今回受賞した作品は、「喻」を用いて存在の秘められた側面を表現する連作の一つで、裸木をモチーフにした作品です。人間を木に喩えることで自然存在としての人間の率直な表現が可能になると考えました。同時入選した作品も籠という隠喩を用いることで、囚われながらも自由を求める人間の姿を簡潔に表現したつもりです。

協会賞

木村 照子=札幌市

居心地の良い教室で20数年。多くの事を学ばせて頂きやっと出品できました。日常生活の中でのひとり言を、好きな色を見つけて描いてきた気がします。つい、過ぎた日々ばかり想いがいきますが、これからも自然に、誠実に、キャンバスに向かっていきたいと思います。

北海道新聞社賞

渡辺さつき=札幌市

今回の作品「蛹」は以前、鍾乳洞の石のようなものと赤子の手を絡ませて描いたモノトーン調の作品から始まったものです。今回は鍾乳洞ではなく泡のようなものですが、このモチーフでの作品づくりをしようという意欲が沸き出品を決めました。大学4年という大学生活最後の1年なので、これを一つの区切りとして今後の制作に活かしていこうと思います。

八木賞

阿部 一真=苫小牧市

今回の作品では現代社会に対する私の感情を元に制作しました。インターネットから提供される仮初の自由に縛られ、依存から離れられない現代の人間の姿を表現しました。以上が主題ですが、以前の作品より多くの人の目に触れ鑑賞者自身の背景と重ねて観ていただけるように強く意識しました。今後更に精進していく次第です。

佳作賞

神原 利樹=洞爺湖町

生命の営みを表現出来れば、との思いで描いています。このテーマはこれからも続けたいと考えています。特にひまわりは、形や色彩そして配置に変化を付ける事で、無限の可能性を感じています。人間は希望や兆しが少しでも有れば生きていけます。見る側にその光を感じて頂ける様なドラマを描くことが、私の『夢』です。

佳作賞

紫和留里子=北斗市

この所制作を続ける意欲が停滞気味でしたが、この度の受賞で元気をいただきました。大きな災害、紛争で混沌とした先行き不透明な世の中の、不安や焦燥感をテーマとして作品を造ってきました。が、力不足で表現出来ていません。しかし今後も同じ方向で続けていきたいと考えています。

佳作賞・新会友

安藤 静枝=砂川市

人間の本当の幸せとは心が自由であること、心が憎しみ、妬み、怒り、から自由に解放されていることだと思います。体の自由さより心の自由さの方が大切、そんな思いで描いた3点の中から、1点が佳作賞をいただき、大好きな全道展の中で、新会友になれたことは、私にとりまして大きな喜びです。

奨励賞

浅井 董=札幌市

絵画部門で奨励賞を頂いた浅井董です。高校生の時に学生美術全道展で数回受賞しましたが、現在は大学2年生で全道展に初出品で初受賞となりました。今回出品した作品では、人工の街と湖を描きました。私達の世代にとって人工の街は故郷で、たとえそこで人工物の弊害にあったとしても美しいと思えることを表現しました。



奨励賞

石井 洋一＝旭川市

今回の絵、子供時代のお祭りや、サーカスなどに対するなつかしさや、思い入れがあると思います。最近、いままで考えられないような事件が新聞にのり、これから、日本はどうなるのだろうと思う時がありますが、暗い面ばかりみるのではなく、明るい面をみつけ、えがいていきたいと思っています。

奨励賞

加藤三枝子＝釧路市

いろいろな難問を抱え、心が折れそうになる現在の人間社会、自分の体の一部がジグソーパズルのピースが剥れ落ちるようなそんな苦境の中でも、生きる価値を見つけ、懸命に立ち上がる強さを表現しようと描いた作品です。まだまだ力不足で課題がたくさんあるが、奨励賞を励みに自分らしい作品づくりを目指していきます。

奨励賞

川上 睦子＝札幌市

移りゆく季節と時間の中で、今年も全道展に出品することができました。

私はこの無窮の時のなかに過ぎて行った多くの思いを感じ、絵を描いているような気がします。

奨励賞

佐々木ゆか＝札幌市

本作は私にとって今後の制作に向けて大きな影響を与えてくれました。「Process」には、人の中にある「心の海」を描き、そこから上昇していく強い決意を持った人間を表現しました。また心の海の静けさは、母親の羊水の様に安らかで暗闇の中に光が灯されている、そんな神秘性と人の成長に向かう姿を制作しました。これからも心身共に精進し制作を続けていきたいです。

奨励賞

佐藤 真康＝帯広市

今回の受賞はとても嬉しく、私にとって大きなものでした。作品の方向が定まらず、結果の出ない時期が続いていて、全道展の出品も考える時がまありました。そのような時の受賞ですから、喜びもひとしおです。これを機会に更に良い作品が描けるよう、がんばって行きたいと思っています。

奨励賞

滝花 保和＝函館市

作品のテーマは一般的に Rock のジャンルにも表される、「EMO」でエモーショナル (感情的な) の略になります。僕の内面に含んでいる感情的な部分、社会に対する内なる反骨心を表したものです。出展の動機は、地元を離れてもっと大きな所でいろいろな人達と交わり、作品をより広い挑戦の場に置きたいと思ったためです。



奨励賞

三浦 一孝＝札幌市

この数年、「朽ちる」をテーマに描いています。動機は農場の一隅に、役目を終えて今は見向きもされず放置されている荷車に気付いた時でした。これを造り、愛し、汗を流し積み上げた仕事の重みを秘めた重量感。朽ちゆく木肌の質感、鉄の表情に命のいとおしみを感じ表現したいと思ったのです。表現はとても難しいですが……。

奨励賞

山口 彩紀＝札幌市

高校生の私が、このような賞をいただいて、驚きと共に嬉しい気持ちです。今回の「朽車」は、決して破壊などといったものではなく、たくさん色を使って朽ちていく中で生じる自然な美しさを表現したいという思いを込めて描きました。これからもっと経験を積んで良い絵が描けるように勉強していきたいです。

奨励賞

横井 文子＝東神楽町

沈黙する美は永遠です。直線より曲線・鋭角より鈍角・四角より丸、生命の造形美に永遠なるものを感じている。この崇高な機能美を描ききる事はできないでしょうが、その不消化が次の作品への意欲につながっています。かかえきれない程の課題を持ちながら、片田舎の一匹狼、厚顔にもモチーフに向かっている。

新会友

岡野 修己＝釧路市

今とはとにかくキャンバスと格闘することが、至福の時です。色々な手法に挑戦し試行錯誤の繰り返しの中、果てしない「宙」と対話しています。新たなストーリーとの出逢いを楽しみ、感動する心を養いたいと思います。この度、新会友推薦頂き、描くことへの喜び、楽しみが、ますます広がった気分です。好奇心を失わず、絵と向き合っていきます。未知との遭遇に期待して。

新会友

川股 正子＝函館市

初出品、初入選は第47回展、題名は「鳥と女」だった。その時から人間をテーマに描いていこうと決めた。

螺旋階段をゆっくり上り続けて来た。落選も出品出来なかった時もあったが……。今は「うれしい」の一言です。まだまだ、道半ば、足元をしっかりと見ながら初心に決めた“人間”を主軸に描き続けていきます。

新会友

棚瀬 泰子＝石狩市

油絵とのかかわり？は随分長い。振り返れば、私の人生も長い。坦々とした毎を送り、何の屈託もないなかで少々の緊張と頑張りで、自分を支えてこれたのは絵、全道展だったように思う。何を題材にしようかなど未熟な表現力をもって、苦悩の連続でした。夢はかなうものですね。先生、仲間の皆さんありがとうございました。

新会員

石本久美子=札幌市

20代の頃、白い空白に魅せられ、その白い平面の中に黒いひとつの『物』を描き入れただけで平面は空間となり得るのか、模索していました。それから絵筆を置いた事もあり40数年も経ちました。最近になってようやくその模索していた事に辿り着いた様に思います。スタートラインがここだったのだと見つけた様な……。

新会員

中谷 喜幸=森町

何か古い物にひかれて描いています。樹であれば穴のあいている物や、朽ちて今にも消えそうな物などです。新しい物より古い物の方が、形や色が面白いということもあるでしょうが、それだけではない気がしています。自分には特に自信のある技術などありません。納得出来るまで、何度でも描き直すしかないと思っています。

会友賞・新会員

土井 善範=札幌市

愛おしくて手放せない『こまごまとした廃品（ネジや歯車、バネ等）を使って奇妙なポンコツのおもちゃをつくる』が如く、これまでの私の命の時間に沈殿した様々な思い出や記憶、それらに張り付いた感情・感覚、イメージのカケラ等をそっとすくい上げ、再構成し描き出そうと苦心しています。そこから、紛れもない自分の世界が現出することを信じて……。

会友賞

池田 宣弘=札幌市

90歳の母は出品前の私の作品をみていつも「お前の絵はようわからん！」と一蹴。ではどんな絵が好きか聞くと富士山が描かれている美しい風景画を私に期待しているとの事。それには応えられない親不孝者ですが、この度の受賞を報告すると「あれで良かったという事なんだね」と一言。陰で応援してくれる母に感謝。

版画部門

八木賞

松浦 進=札幌市

自分が納得のいく作品を制作することをいつも考えて制作活動に取り組んでいます。やはり評価される事は嬉しく励みになるなぁと感じました。自分の表現を続けながら周囲にも応援される作家になっていけるよう、今後も作家活動が続けていきたいと思っています。

佳作賞

佐藤 一=札幌市

昨年6月、スケッチ旅行で登別漁港を訪れました。雨かけぶる深い緑に包まれた崖壁が美しく、張り切って制作にとりかかりました。しかし、イメージと若干異なる作品となりました。何かひと工夫が足りなかったのでしょう。自然の感動を素直に表現できるよう、今後も努力していきたいと思っています。

佳作賞

藤林 峰夫=札幌市

思いがけない受賞が、これまでの出展作品への期待と裏腹のところにあるのは、技量が未熟であることの証であると感じています。かつて講評で「早く自分の世界を」とのアドバイスをいただきましたが、木版の伝承技術でノスタルジアをテーマに据えて、日々研鑽し努力していきたいと思っています。



奨励賞

木全 佑衣=札幌市

この度は、奨励賞を頂きまして、真に感謝しております。まだまだ未熟ですが、制作を続けられる喜びを改めて感じました。お世話になった先生方や、応援してくれる周囲の人達へ感謝の気持ちを忘れずに、これからもより一層ひた向きの姿勢で制作に取り組んでまいりたいと思います。ありがとうございました。

奨励賞

佐々木千晶=札幌市

昔から花が好きでした。自然界の中でも際立って美しい色、形、香り等々花は天上からのギフトだと思います。おのずと花をモチーフにするようになりましたが、勿論、思い巡らしたイメージ通りに描けませんし彫れません。摺れません。ただひたすら真摯に向き合い何度も失敗し作品を作り続けて行くしかないようです。

奨励賞

相馬 瑞恵=札幌市

昨年の全道展が終わり、喜びと共に次作について不安を感じていましたが日がたつにつれ、まだまだ出来ないことがたくさんあると思い、同じテーマで描くことが出来ました。以前と違うことは私の頭の中で銅版画について考えていることが多くなり、気がついてはうれしく、驚いています。

奨励賞

谷 博=札幌市

作品は石狩市生振の防風林の早春の姿である。野面には雪が残っている。樹々は芽吹きはまだだが目覚めていて樹液が動き始め、林全体は明るさを増している。折りしも、赤いコートの女性が防風林と交差する路を歩いて抜けてきた。春の匂いを求めるように。果して作品を前にした人も、この世界にひたりたいと思ってくれるだろうか。

新会友

佐藤 麗子=滝川市

森林の中で涼風に心癒された夏の日々、「夏木立」の優しさと厳しい自然の中で生きる逞しさをテーマにさせて頂きました。今までの作品の中で「木」をテーマにする事が多いのですが、以前から「植物」にとっても惹かれています。それをこれからの作品で表現出来るように精進したいと思っていますので宜しくお願い致します。

新会友

三浦 正志=北広島市

歴史の中に朽ち果て行く「強者共の夢の跡」的なものに引かれる傾向はありますが、未だに自分のテーマを見つけたという自負はなく、私の力量では無理では、という不安感でとても作品作りを楽しむ余裕はありません。構想に悩み下絵までだけで4年もかかりましたが、結局不満と反省だけが残りました。



新会員

大澤あい子=札幌市

この喜びは夢かと思いましたが日が経つことで本当なのだと胸があつくなりました。喜びの裏側に少しの不安があります。今後、この不安がなくなるよう精進していきたいです。少しでも自己主張があり、情感が溢れるよう強い気持ちを持って“冬場の情景”を追い続けていこうと改めて思い起こしました。早く楽しい気持ちをもって制作に向かえるようになりたいです。

会友賞

坂 みち代=札幌市

光と影がテーマですが、作品の表面的な部分と内面的な部分のそれぞれに光と影は存在すると思っていて、何とかその両面を表現したいと考えています。幼な子の姿を借りて自分自身の内面を描き出したいと努力しているのですが、中々難しく苦悩の日々です。銅版画という限られた画面の中で出来るだけ、自分の思い通りに表現できる様に頑張りたいと思っています。

初出品・入選

岡島 章子=札幌市

このたびは、初出品にもかかわらず、入選した事は大きな喜びでした。版画制作は2009年から取り組んでおりますが、今回の様な大きな作品は、初めてでした。初めて描いた大きな版画が、入選となり喜びもひとしおです。この喜びを励みに、今後も版画制作に取り組んで行く所存でございます。

初出品・入選

林 恭子=札幌市

私は、夫と六人の子どもと共に八人家族で暮らしています。全員を一枚の版画で表現したことはなかったのですが、今回挑戦してみました。子どもたちは日々、どんどん成長していきます。上の子が下の子に絵本を読んであげていると、みんなが集まってきました。そんな家族のひとときを切りとった作品です。

初出品・入選

田荷 和晃=札幌市

入選の通知を見て感じたのは、喜びというよりはむしろ、安らぎでした。初出品な上に技術が未熟ということもあり、落選の可能性も高いかなあ、と思っていたところでしたので、結果が出てようやく一息つけたところです。今回の入選で作品制作の意欲もますます高まり、今後とも精進していきたいと強く思いました。

彫刻部門

70周年記念賞

宮下真理子=北斗市

直径約1m、高さ約2mの丸太を前にした時、迫力と存在感に圧倒されました。原木に手を加えることの意味を考え、無我夢中で彫り進めました。節、繊維のねじれ、割れがみえ、様々な表情が表れる木に対して親近感が湧いてきました。完成したものは彫り込んだため、細く無骨ですが、木の持つ生命感や強さを実感できました。

全道展授賞式・懇親パーティー



佳作

佐藤 邦子=苫小牧市

37年ぶりに、またこの(美術の)世界に戻ってきました。皆様から見ると、さしずめ37年前の地の底から舞い戻ってきた亡霊か? はたまた、37年ぶりに墓の中から甦ったゾンビか? いえいえ、せめてカムバックサーモンのごとく郷里の川に帰ってきた鮭ぐらいにはなりたいたい。朝、目覚めた時に、まっ先に彫刻の事を考えることができる今に感謝する毎日です。

初出品・入選

野澤 直之=美唄市

なぜ彫ることに時間を費やしているのか、考えています。本心を探り、堂堂巡りに陥ります。実社会に接点を持つと思い、出品しました。出品することは、手放すことでした。僕は安全面、精度において、手放しの責任を負えたか。意外な収穫は、結果を待つ数日、自分の中にワクワクとした気持ちの起こりを感じたことです。

工芸部門

奨励賞

阿部 綾子=福岡市

出身地である札幌の公募展に挑戦しよう！ 全道展との出逢いはホームページ。会場にも行ったことがなく、知り合いもない。パソコン画面から飛び出してくるような熱さを感じて。力が欲しい。陶芸とどう生きていこうか。全道展は、色々なことを私に与えて下さいます。感謝申し上げます。また来年に向けて、個として、張り切ります。

奨励賞

小杉 教一=札幌市

定年後、裸婦を主体に制作しています。ただ家族からは色ボケ爺とひんしゅくを買っています。この受賞で見直される事を期待しているのですが、どうなりますか……。漆技法で油彩画の様な表現が出来ないかと工夫しています。それと、東北大震災後は“折り”が作品のテーマになりました。

奨励賞

宮本瑠美子=北広島市

「緋染」と「裂織」の二枚の織物を重ね、深みのある藍を表現しました。二度目の出展で奨励賞を頂き大変うれしく思っております。若いころは憧れの間だったので自分には無縁と思ってました。人生も折り返し、限りある時間を織りに費やせることはなんて幸福なことでしょう、感謝です。

会友賞

堀田 佳代=岩見沢市

成型した作品に、化粧土を施し、半乾きの状態で化粧土の部分の削り落とし、地の土を出して、目指すものを表現する。「太陽と月」をテーマにしていたが、太陽と月だけでは不足、星を削り、雲も削った。削り進めるうち、見上げる天空になり、宇宙へと広がり、そこに漂っている気分になった。だからテーマを「浪漫」とした。

初出品・入選

原 あけみ=富良野市

織を始めて27年になります。今回の作品を織っている時、道新で70周年記念全道展の記事を見て、出品してみようと思いました。作品は夕暮の海に鳥が飛んで行き、又あした会えたらうれしいなという気持ちで織ってみました。



カット 杉吉 篤

初出品・入選

辻 里佳=浦河町

幼い頃から常に馬と接することの出来る環境で育ち、高校卒業後に北海道を離れ大都会に出た事で改めて、地元の豊かな自然と馬の魅力に気づく事ができました。そんな時、切り絵という手法と出会い、初めて夢中になれる物を見つけました。作品を作り始めて一年余り、芸術に対しても未熟ですが、切り絵を通して人と馬との深い繋がりを自分なりに表現していけたらと思っています。



〔絵画〕 森 弘志＝新得町

発行 50 号までの道程は決して平坦ではなかった。編集に携わった一人、森弘志会員（27 号～32 号担当）に足跡を振り返ってもらった。

70 年目の全道展、Zen もまた 50 号の節目を迎えました。1978 年、竹内事務局長の下、渡會次長を中心に発案されたのが、全道展機関紙 ZEN（当時は大文字表記）で、ポスター画集等印刷物の充実が進む中、更なる啓蒙や発信の場として、前向きな気運の中で創刊されました。しかし、事務局負担の増大や予算縮減などの理由で、ZEN は 90 年代に入った頃から休刊を余儀なくされていました。私が会員になったのは 20 年前の丁度そのころのことです。

現在は二日で審査が行なわれていますが、当時は三日間で、部門別審査導入が定着し、総会、集合写真撮影、部門別審査、総合審査の流れで行っていました。しかし、私が会員になってやや暫らくしてから気付いたことなのですが、部門別審査の結果を尊重するあまり、総合審査は審査とは名ばかりの報告承認の場となり、他方、審査での事は他言無用の申し合わせが、まるで箝口令を敷いたが如く曲解されて、積極的に公表すべき優れたやり取りまでもが伝えにくい雰囲気形成され、重苦しい空気が支配しつつあったのが ZEN の休刊時に進行していた気運でした。やがて私達は大きな問題と対峙する事になります。世の中が、ミレニアムとか急拡大するヨサコイとかで騒々しかった頃の出来事です。あらためて ZEN 旧号や各種印刷物を読み返してみ、時に小川原脩創立会員の言葉を借りた伏木田会員による「集団と個」への言及には、表現者や全道展の根幹、あるべき姿が重いメッセージと共に込められている事に気づきます。

集団と個…それは全道展が揺れた数年間の出来事です。私は地方会員であった為、知り得る事、触れる事には限度がありますが、ZEN の復刊に関与する事でもありますので、ここに略記しておこうと思います。

冬を迎える少し前、一人の工芸会員から、工芸部を除く全会員に書簡が届けられました。工芸部の審査が歪んでいるといった内部告発的な内容だったと記憶しています。直後から波風が立ち、翌年の総会からは議事すらままならない程に荒れ、それは臨時総会を含め数年続くこととなります。事実認定作業が暗礁に乗り上げ、工芸部内少数対多数、全道展内少数対多数が、箝口令が敷かれていたかの様な頃とは真逆に、まるで爆発させるが如く発言を飛び交わし、ねじれたまま、噛み合わないまま時間は過ぎ、私達の疲労は蓄積して行きました。

関心が「何が」では無く「誰が」に突き進む中、公的な場とは別に、事務局や道新、グループや個別にも善後策が検討され、書簡配布の工芸会員による文書撤回と謝罪で一度リセットする準備が整った段階で、集団退会という残念な結果に至ってしまったのが 1999 年春でした。

前後しますがその前年、審査終了後の臨時総会での事、通常とは違い、道新事業部に文化部も加えて推移を見守る中、ことさら日曜であることを強調するかのよう、ラフな服装で最後の挨拶に立った M 事業部長は、噛み合わない議論をたしなめるかの様な発言で締めました。私は、それはその場にいた我々全員に向けられたものと受

昭和 53 年 創刊号
B5 版タテ書き、
8 ページでの
スタートだった。



共に何度も書き直しのある、鉛筆書きの直筆原稿。

け止め、恥ずかしい、申し訳ない気持ちでいたところ、一部の人はその発言にすら噛みついたと後日耳にしました。その頃に境に、道新文化欄から道内の展覧会評や美術の記事がほぼ失われる数年が続きます。

今では信じてもらえないでしょうが、当時、全道展の解散も一部でまことしやかに語られていました。道新との共催解消、工芸部の廃部など百出し、現行体制の維持は少数意見だったかも知れません。金属疲労の修復は難しいものの、「何が」を考察するところから再び歩み出し、例えば、コミュニケーション不足の解消、声を発する場の拡大という文脈で、ZEN の復刊も検討され、十勝の私達が再刊に向け、準備を進めることになりました。

低予算でも発行出来る様駆けずり回ってくれた方々、全道展黎明期を知る方々、「私共の広告を発行費用に充てなさい、広告費は言値で良い」とアシストしてくれた当時の道新事業部次長さんらの助力で、機関紙 ZEN から交流紙 Zen へとマイナーチェンジして再刊に漕ぎつけ、再刊 27 号は講評集を伴ってコピー印刷にて発行。実は交流という言葉には、事後処理を担った当時の人々の切ないまでの願いが込められ、私の中には伏木田さんの「全道展は有情であれ」が胸にありました。

仕事柄、土日の審査に参加できないことを気に病んでいて、タイトルロゴ案を 11 も作ってくれた徳丸滋さん、丁寧に見ている旨を伝えたいと講評集の執筆を快諾してくれた皆さん、60 歳年下の私の依頼に応じてくれた小川マリさん、長年全道展を応援し続けてくれた竹岡和田男さんへの追悼文を書いてくれた遠藤ミマンさんありがとう。要求、おもねり、非難はたやすいけれど、自分達で出来る事は自ら行う。排することを解決手段にしないなど、傷付きながらも学んだ上での日々の事で、再刊 27 号発行の翌年、2002 年初夏、道新紙面には全道展展覧会評が、小さいながらも再び戻って来たのでした。

全道展 70 周年記念企画展は 近未来を予見する

全道展 70 周年記念企画展実行副委員長

梅 津 薫 = 岩見沢市

2015 年 6 月、全道展は 70 周年を迎えた。70 歳といえば、一昔前ならかなりの老人と思われていた。老人自身も社会全体もそう思っていた。全道展会員の平均年齢もちょうど 70 くらい。40、50、60 周年のころと比べると少々元気がないのは仕方がない。しかし赤瀬川原平が主張したような「老人力」が増したことも確実である。この「老人力」を「絵画性の確立」「自己の確立」(のレベルの高さ)と言い換えるとわかりやすい。つまり全道展の会員たちの仕事は自分の世界をもった表現者たちであるということだ。つまりそこまでのいかないと会員にならないのと同義語である。そしてその世界を目指す会友たちの熱いエネルギーは、近未来を予見し、それに刺激を受けた会員が新たな予見をもって会友に語りかける。この企画展以降、そんなキャッチボールのやりとりが続くことができれば……。

さて「70 周年記念企画 会員・会友展」は北海道立近代美術館において 2015 年 10 月 31 日(土)から 11 月 8 日(日)の 9 日間の開催予定である。※11 月 2 日(月)は特別開館日

当時の事務局が 2013 年に「場所、規模、内容等を会員にアンケート」した結果、北海道立近代美術館において、会友・会員の作品を同列に陳列するという事に決まった。全道展では初めての試みである。先に会員のレベルの高さに触れたが、会友の位置は重要である。会員に逆に刺激を与える新しい感性を包含する制作者たちにとって、この近美の場こそふさわしい。会員・会友相互にとって刺激と緊張、新たな発見の場となるだろう。

出品作品のジャンルは平面、立体とかなり幅を持たせ、現存の部門にこだわらず自由な出品とした。

壁面空間はかなり悩ましい。企画の基本は会員・会友が横一列であるが、すべて 100 号程度の大作を並べるのは不可能である。そのため最大横幅は 130.3 cm とした(F 60 横=100 F 縦)。大作にこだわらず、小品でも魅力ある世界の展覧を期待したい。※一部 2 段掛けが生ずる場合はお許し願いたい

その他、近美関連企画として、文化講演会、寸劇、カレンダー 2 種、会員有志による絵葉書の販売が予定されている。制作者はもちろん美術関係者、愛好家の方々、どうぞご期待下さい。

開 放 区

エッセーコーナー

テーマは前号に続き「リラックスタイム」です。
今回のお二人のほっと一息の時間は？

この古いレンズは何を 見てきたのだろう

〔絵画〕 土井 善範 = 札幌市

私はどうも古いモノが好きなのである。新しいモノには簡単・便利という価値が備わっているのだが、ほっと一息入れたい時にはアナログのモノに手が伸びる。一日に一度はレコード針で引っ搔く温かい音を耳にし、蛇腹やバネを使った古いカメラを手を取る習慣がある。

小学生の頃、「日光写真」と壊れた目覚し時計からゼンマイを取り出すことに夢中になった、という原体験と懐かしさもあってか、時々「燃えないゴミ」同然の壊れかけた埃と錆びだらけのカメラを見つけ、分解と清掃と修理で再生し写す。とても良いことをしたような(歴史的文化財保護?)気分になれるひとときだ。中には 1920 年前後、厚紙と木を使ったドイツ製のカメラに出会ったりして、「95 年の歳月を経て現代に蘇った!」などと一人静かに興奮し、口笛を吹いたりするのである。



山のカフェ

〔版画〕 武田 志麻 = 赤井川村

コーヒーか紅茶かと問われたら私は紅茶派なのだけれど、コーヒー豆を挽いてドリップは得意で自信もある。コーヒーを美味しくいれるおまじないも欠かさない。

そんな私のルーツはやはり母で、現在赤井川村でこだわり野菜の直売をしている。屋号は「アトリエ NAYAcave」。おかげさまで定着してきたものの始めた頃は「お茶できますか」とよく尋ねられた。カフェとして開放することも考えたようだが、実現していない。これで良いのだと母は言っている。今でもたまにそう聞かれることがある。そんなとき私は「メニューはミニトマトジュースだけのカフェです」と答えるようにしている。おいしい空気と青空の下、わが家のミニトマトジュースを風呂あがりの牛乳みたいに飲んでいかれるお客様も増えている。そんなカフェがあってもいいじゃないかと内心一人でおもしろがっている。



作家探訪～「伊藤 隆弘」

硬質で豊か 空間と実在のせめぎあい

取材：川名 義美＝札幌市

札幌の都心から車で小一時間ほどの長沼町。

市街からそう遠くないスタジオが、数々の作品を生み出す伊藤隆弘会員の「理想のアトリエ」だ。

道内外のみならず海外コンペに参加するなど幅広い活躍ぶりは、全道展ホームページの経歴に詳しい。

5月中旬、同じ彫刻部の川名義美会員が訪ね、スタジオで話を聞いた。

ジウジアーロをご存じでしょうか。往年の名車、117クーペやピアッツァをデザインした、イタリアの工業デザイナーです。その仕事は直線とエッジの効いたフォルムで美しく、当時、誰でも一度は憧れました。「ピアッツァはやっぱりドアミラーのほうがいいなあ。」と思ったものです。

石彫の抽象制作は、大きく二つに分類されると思われます。一つはその圧倒的な「量」を前面に出した仕事であり、もう一方は、石の持つ固い質感を空間に対する緊張感として表現する方法です。

伊藤さんの作品は、後者にあたります。石という素材をギリギリまでそぎ落とすことによって、硬質で、むしろ豊かな「量」をそこに感じさせます。

「制作の時は、ラインを一番大切にする」という伊藤さんの言葉は、当然、空間と実在のせめぎあいによって生じる、サーフェイスを意味するものでありまして、平面のそれとは違います。そんな伊藤さんが「若い時はジウジアーロが好きでさあ…。」と聞いた時、私は我が意を得たりとポンと膝を叩きました。（いえ、実際には叩いていません。）「なるほど」と心ひそかに思ったのでした。

伊藤さんは金沢美大の出身です。当時は木彫教室に在籍していたそうです。（!!!）しかし、その後石彫をはじめ、「大切な知識や技術はすべて石屋に教わった。」のだそうです。道理で、キチッとした作品を造られるわけです。そんな伊藤さんの作品は長沼の市街からほど近いスタジオで造られています。十分に広さを持ったその建物は、自身の石彫ばかりでなく、陶芸の施設や雪像づくり（彼はその道でも活躍中です。）の道具類、息子さんの木彫も保管できる、まさに「理想のアトリエ」です。他にもう一棟、小ぶりのスタジオがありまして、その一階では奥さんが石を彫っておられ、二階部分はエスキース制作やスケッチを描くデスクスペースとなっておりました。

若くして石に魅せられ、（ご本人は、「石に取りつかれた」と言っておりました。）石彫を「ライフワーク」と語る伊藤さんの家の周りには、今までの作品が数多く並び、「正確な場所わかるかな？」と危惧していた初訪問の私の思いを払拭すべく、「ここです。」と強く主張しておりました。





第16回

あの日 あの時



入選は遠かった…

〔絵画〕 今西 直人=茅室町



「あの日、あの時」を考える時、初入選まで3年連続して落ちたこと、これが一番の苦い思い出である。

全道展を意識しはじめた20代後半、初めて100号にチャレンジ、何とか2点仕上げて当時の会場、近代美術館に持ち込んだ。なぜか業者に依頼せず、愛車セリカの背中にくりつけ、狩勝峠を越えて運んだ。

そして4年目にして初めての入選。早速かけつけた近美の21室壁面に私の絵、F50の「牛」があった。(当時複数出品の場合F50が必須であった)35周年記念展の時である。

数回の落選にもかかわらず益々全道展が好きになっていた。それは、いい加減をゆるさないこと。絵画の本質がみられるか。絵に向かう真しな姿勢が表われているか。ということが落選の中で得ることになった。自分を素直に表現することの大切さを学んだ。入選出来た絵も自分が描きたい絵はこれだとの意識が少し感じられた時だったようだ。

全道展を語る時、同じ町に住んでいた故村元俊郎先生の影響が大きい。たまたま喫茶店で一緒になりズーズーしく、絵の描き方を聞いた。先生のアトリエを訪問するようになり、全道展の魅力にとりつかれた。

「牛」を描きだしたのも先生の「何か、テーマを絞って追求した方がよい」とのアドバイスを受けてだ。当時の家業(酪農)の牛を即、選んだ。あの骨ばった四角い形の中に秘められた優しさと強さをキャンバスいっぱいに表現したいと思った。牛を描いている作家も当時、小島真佐吉先生を始め沢山の方がいた。参考にすると共に、興味をもって取り組んでいたキュビズム、立体派、中でもブラック、ピカソから多くを学んだ。牛の形を大きく分割して、再構成、牛の強さを表わしたいと挑んでいた。そして形にとらわれることなく、キャンバス内での造形が絵を創ることを意識しだした時、初めて入選の知らせが来たのだった。

桜時のこと

〔版画〕 北川 佳枝=小樽市



春三月桜時に、愛知県犬山の博物館明治村を訪れた折、思いがけなく如庵を拝見する機会があった。

「如庵」信長の弟茶人有楽斎が元和四年(1618)ころ建てた茶室で、国宝茶席三名席の一つ、犬山城下にある。二畳半台目の内部、有楽窓と呼ばれる竹の連子窓は、竹の節間からこぼれる光が障子に縦縞の影模様を描き、微妙な明暗をつくる。柱や壁の感触を実感し座してみると、極められた空間、ただならぬ緊張感が迫ってくる。書院の広縁で一服いただきながら、あの緊迫感は、とっと思っていると、露地の釜山海は加藤清正が朝鮮より持ち帰ったものだ^{にじり}という。武装具をすべて解かなければ躰口から入室できないが、払いきれない「気」が空間を漂い壁や柱に染み入っているに違いない。波瀾の人生を送った有楽斎は晩年武家を棄て京都建仁寺に隠棲した。桜と若竹を配した萱門に花びらが舞う。彼はこの風情をどのような思いで眺めたのだろうかと思いながら庵をあとにし、伊豆松崎へ向かった。

松崎は漆喰彫刻の名工入江長八が生まれ、なまこ壁の町並みで知られるが、那賀川沿いの堤防に桜並木が6キロも連なる。朝早く、花の土手道を1時間程上って岩科学校へ行った。山裾のそこは今も畑が広がる里風景のままある。明治初め、この村内の教育振興熱が高く、校舎建築費の4割余が村民の寄附金だった。展示しているのは村の暮らしや仕事の道具など。その中に村民の寄附金台帳があった。明治十三年、壺円、参円と村人の名前が記されている。その志を心に刻み、川沿いの道へ帰り始めると、ふいに一つの風景が見えた。桜並木の土手道を「学ぶ喜び」いっぱいに駆けてくる着物姿の子供達、そして畑仕事の手を止めて晴やかな思いで送る村人の姿。思わず立ち止まり子供達の姿を追うように振り返ると、満開の桜に白壁が映える学び舎は温かく凜と彼らを迎えているように見え、桜時、これほどふさわしい風景はないとしばしたずんで余韻を楽しんだ。季節が来るとこの心象風景を「風景画」のように思い出す。



無謀な挑戦

〔彫刻〕 葦沢 淳一＝札幌市



初出品作品「FADE OUT」

約30年前私が勤務していた学校に、当時全道展に出品していた渡辺行夫先生が転勤してきた。ある日先生から大作に挑んでいるという話を聞き、制作現場にお邪魔することになった。第一印象は道路工事、またはトンネル工事そのもの。先生はつなぎの作業服を着

て、顔には防塵マスクというスタイル。大きなカッターと見るからに重そうな削岩機を使って^{はっ}研りの作業を延々と繰り返していた。「彫刻制作」という言葉から抱いていたイメージとは全く別物であった。作業のダイナミックさ、石という素材が周囲に放つエネルギーと存在感、作品のスケール感に圧倒された。そして困難な作業に立ち向かう先生の姿・気概に感動を覚えた。それがきっかけで彫刻に興味を持つようになり、いつか自分も作品を作りたいという願望が芽生えた。

ある時先生に「自分も作品を作りたいのですが、できますかね?」と恐る恐るきいてみた。「やる気があれば誰でもできるよ。やってみたら。折角だから作品ができたなら全道展に出品してみたら」「でも全道展って、本格的に美術を実践されている人たちの展覧会ですよ。そんなところに自分のような素人が出品して良いのですか?」「全然かまわないよ。誰でも出品できるよ」「本当ですか?」「本当だよ。それに今まで美術に関係ない人間が出品するのは面白いし」「誰でも出品できるよ」の一言を真に受けて、実際に自分で作品を制作することになった。悪戦苦闘しつつも何とかイメージ通りに仕上げ、その作品を1993年の第48回展に出品した。入選を果たすことができた。初入選の喜びは新鮮で格別であったが、何よりも先生が喜んでくれたことが嬉しかった。

数年後、飲み会の席で私の初出品当時のことが話題になった。その時先生は、「やってみたらとは言ったけど、本当にやるとは思わなかったな。それと作品制作は上手いかず、バラバラになると思っていたよ。まさかニラさんが本当に作品を完成させ出品できるとは思わなかった。そして今も続けているとは……。しかし変わったやつだな」と言うのである。そう言われると確かにその通りである。今思えばつくづく無謀な挑戦であったと思う。

芸術と用途の狭間で

〔工芸〕 小前 晴美＝室蘭市



所属していた陶芸サークルでは、皿やカップといった『用途』の作品を独学で自由に作り、楽しんでいました。サークルの先輩達が全道展への出展準備をしているのを見て、見よう見まねでオブジェをつくったところ、勧められ出展した作品が入選。入選作を見に行った会場で多くの素晴らしい作品を目の当たりにし、こういう世界があるのかと衝撃を受け、同時に、その中に自分の未熟な作品が置かれている現実^{はっ}に身の置き所のない恥ずかしさを覚えました。自分の世界をオブジェを通じて表現していきたい、又、全道展に出展するにふさわしい技量を磨きたいと強く思い、本を取り寄せ、様々な技法を試行錯誤する日々が始まりました。

全道展の絵画部門で出展していた姉から、必ず3品は出展するように言われ、会員になるまでメインとなる作品2点、研究中の作品を1点出していました。3点出すのは大変な事でしたが、技法の蓄積という点で今に繋がるものが多く身につきました。平成12年奨励賞受賞を機に、自宅庭に築窯した事も大きな転機となりました。周りに遠慮せず、作陶に没頭する場を持てた事で全道展会員になれば、平成23年の日展入選にも繋がったと思います。

早いもので、陶芸を始めてから四半世紀近くたちました。年々強く感じる事は、『芸術と用途の狭間に揺れる工芸』のあり方です。

工芸が絵画や彫刻より下位にみられがちなのは絵画や彫刻を美術、実用的なものは工芸と分けた明治より前からのあり方ゆえですが、土やガラス、織、金属といった素材や技法の制約のある中、空間表現で作者の思いを訴える事のできる工芸は素晴らしい芸術であると思っています。

そうした歯がゆい現状を踏まえつつも、陶芸の道を究め、多くの人にその魅力を伝えていきたいと作陶に没頭する今日この頃です。

創造と思索



耐え忍んでの 創作の喜び

〔絵画〕 石原 佑一
＝函館市

1、地元の画壇と先輩に 学ぶ

函館は大正から昭和へと北洋漁業や造船業で栄えた街である。そして、多くの文化人を輩出している。

大正10年、赤光社美術協会の創立は北海道画壇の先駆けとなる。創作する道南在住者は、この画壇の存在に、何らかの強い影響を受けてきた。

函館市民を魅了した行動展と全道展の函館巡回展が、ある期から平成初期に開催された。会場準備の一連作業は仲間意識を芽生えさせた。その時の、先輩からの作品評と励ましの言葉は、今も耳に残る。一人ひとりの芸術家が、己の造形美を追求していた場となった。日々の創作は不可能であることを可能とする夢を託す仕事であると思う。私は小さな街の地元画廊を彷徨し、様々な作家から学んでいる。

2、生活の自立と格闘する制作

私は美術教師としての教職に就いた。制作する人への、命の感動を伝える美術教育が可能と確信したからである。当時の教育は実践研究の集会在盛んであった。私も制作と研究に励んだ。私の主題（家族）の原点と教研集会の共同研究者（元全道展事務局長／渡辺貞之氏）が提唱した「人間と風土を基底とした人間観」の一致は忘れることが出来ない。

絵画の価値観は多様である。新国立美術館の行動展作品トーク会場で、札幌市の半具象作家のM氏が私と同様の悩みを話していた。「描いていると、元にもどってしまう」と言う。私は構成が未完と思った。私も何度も同じことを経験していたからである。そんな私は、平成14年9月10日付の道新記事が頭に浮かんできた。秋の公募展で、私の作品「人間家族2002-A」の写真と「印象的な母子像」と評されたことである。一略― 鮮やかさを競う絵が多いのが昨今の風潮だが、この絵は何かを押し付ける。―中略―

私は古希となる。4年前の心臓手術（僧帽弁置換）から、体力は衰えている。仲間からの個展やグループ展の案内状は、私を元気にさせてくれるエネルギー源となっている。

私の絵は下手である。それでも、絵を描き続ける。



歳月を重ねて 見えてきたこと

〔彫刻〕 森川ヒロシ
＝釧路町

街なかにツグミが羽を休める姿が目につくようになってきた。もうじきツグミは群となり、2度3度家並みの向こうの空を旋回したかと思うとい

つの間にか姿を見せなくなる。シベリアへ旅立っていくのだ。ツグミの旅たちと共に間もなく待ち焦がれた春がやってくる。

いつのことだろう。私のポケットの中に今でも忘れられない光景がある。もう何年も何年も前のことだ。青い空の温かな日だった。妻と二人で岩保木水門につながる川沿いの土手に出かけていった。静かな風が行きかうだけの道ばたに、腰を下ろして二人で川向こうの阿寒の山を眺めていた。目の前のオオアワガエリが静かに風にたわんだ。そよと吹くかすかな風に包まれながら、限らない静寂の中に心が満たされていった。

若い頃には気付くことのできなかったたゆたう風。感じとることのできなかった静寂の心地よさ。きっと目を向けようとしなかった野の草花。でも、ものつくりの歳月を重ねるうちに自分を見詰める仕事を通して、何かしら色々なものが次第に見えてきた。一体自分は何に心とらわれ、何に向かい何を大切に生きていこうとしているのか。うす桃色の朝日。木立の奥からやってくるカラ類の囀り、鳥道の不可思議。風の通り道。気層が冴える11月からの星々。剣のような一日目の月。シリウスの輝き。月明かりの青く透きとおった小径。月の通り道。気持ちに向けて観ることで、見えてくる美しさが身の回りにはあふれている。

それら一つひとつが記憶として心の奥深くに、静かに静かに降り積もっていく。その一つひとつの断片を、結びつけては紡ぎ出す。それが今の私の大切な仕事と思っている。



カット 阿南ゆう子

ZEN 紙上美術館へようこそ

世界に一つだけのミュージアム、それが ZEN 紙上美術館。どうぞゆっくりご鑑賞ください。

ブリュッゲル礼讃

〔版画〕 手島圭三郎＝江別市



私がブリュッゲルの版画から強く影響を受けた時代は26歳～38歳の頃で、当時「あの作者（私のこと）はヨーロッパの古典を下敷きにしているけどまだ本当の仕事になっていない」といわれ、また「ヨーロッパの古典の影響が見られるが、それなりに消化しているので面白い」ともいわれていた。有り難いことに全道展は私の味方してくれたが、日本版画協会は認めず、私の作風が北海道をテーマとする42歳になるまでは会員にはしてくれなかった。

私は北見オホーツク管内の生まれで国鉄職員の父の転勤7回はすべて農村漁村の田舎生活で、のちの学生時代に街で育った同級生の自分より一、二歩進んでいる姿に劣等感を持ち、当時の新しい美術の方向がなかなか理解できなかった。昭和32年学芸大学（現教育大学）を出て千歳市で中学の教師となった。東京では次の年ゴッホ展があり、その盛況さが報道されている折、当時の新鋭画家が美術対談の中で「ゴッホ展で大騒ぎしているが、現代の日本の美術団体で、あんな写実を認める団体は無い

だろう」と言い切った。

当時はそれを否定できないほど新しい美術の方向は抽象という流れだった。私は学生時代からフォーブ的な表現になじめず更に下宿の狭い部屋で油彩の大作が描けないこともあって、木版画へ転換し抽象、具象の混迷の数年間が続いた。そんな時ブリュッゲルの絵に感動し具象表現へ移った。しかし当時としては完全な逆コースで、木版画は時代後れ、銅版、石版、シルクスクリーンが主流といわれ、それは大きなカケであった。

そんな事情もあって36歳になってやっと自分のブリュッゲル風の木版画が認められ、全道展の会員になる

ことができたが、その年道新からの依頼で更科源蔵氏の「アイヌ文学を探る」の文章120回に挿絵カットを担当することになった。その時北海道に生まれ育ちながらいかに北海道を知らずに過ごしてきたか、ヨーロッパの古典ばかり眺め、安易にそれを自分の作画の根底としてきたことへの反省があった。それは身近な北海道を見て学ぶことだった。江別に住み野幌原生林が近くにあるのは好都合で10年間に3000枚の自然動植物の観察スケッチを描いた。

これは、ヨーロッパの古典志向から北海道志向の転換で、田舎で育った私のアイデンティティが明確になってきたことだった。40歳の頃から北海道をテーマにした絵に変わった頃、ある批評家は「君の仕事がローカル派になってはつまらない、世界的に通用する表現でなくては」と言った。地に足のついた仕事をしようと思う私の方向も当時としては大きなカケだった。

そんな時にブリュッゲルの生き方に学ぶところがあった。当時の画家の目指す華やかな王侯貴族のパトロンとはならず、百姓ブリュッゲルとして自由の世界を進んだこと、当時宗教に拘束されずに生きたこと、大胆にも宗教に批判的でそれが画面の中に多くの寓意として現れていると多くの研究者が述べている。その自由な表現は現代にも通じ、今見てもブリュッゲルの絵には新しい発見がある。そしてブリュッゲルから離れたつもりの現在でも自分の絵の中に部分的に顔を出す。

ブリュッゲルは素晴らしい。そして新しい。

—次代を担う— 第4回 全道展新鋭展開催

2014年10月30日(木)～11月4日(火)

第69回展の受賞者・新会友・会友選抜者の作品による新鋭展が会場の大同ギャラリーで開催された。

搬入、陳列作業もスムーズに行なわれ、絵画部門は藤田博子さん(道新賞、新会友)外15名、版画部門の岩谷信昭さん(会友賞)外6名、また彫刻部門から竹村孝夫さん(新会友)外1名、そして工芸部門では阿部綾子さん(佳作賞)外1名の総勢27名が出品した。初日には和やかな雰囲気の中で懇親会も開かれた。



有島武郎青少年絵画展の 審査員が替わる

道内の中高生を対象とした歴史ある絵画展、有島武郎青少年絵画展(後志管内ニセコ町、北海道新聞社主催)の3名の審査員が全員交替した。

これまで長年にわたり吉田豪介氏(美術評論家)と全道展から野本醇会員、竹岡羊子会員が務めて来たが、昨年の第26回展から佐藤友哉氏(札幌芸術の森美術館館長)と全道展絵画部門の羽山雅倫会員、佐藤光雄会員の2名に道展から1名の計4名が審査に当たっている。

第2回 北のアーティスト l'automne ロトンヌ

2014年11月12日(水)～11月17日(月)

道内、外で活躍中の全道展の作家8名による油彩、版画展が昨年に引き続き丸井今井一条館8階の美術工芸ギャラリーで開かれた。今年も熱心な美術ファンが足を止め、じっくり観賞する姿がみられた。

第71回全道展(札幌市民ギャラリー)

会期2016年6月15日～6月26日(月曜休館)

授賞式・パーティ 6月18日(土)～全日空ホテル



70周年記念全道展 札幌市民ギャラリー

第57回学生美術全道展(札幌市民ギャラリー)

会期2015年10月3日～10月7日(月曜休館)

搬入 9月29日(火)

審査 9月30日(水)

陳列、新聞掲載 10月2日(金)

表彰式 10月4日(日)

搬出 10月7日(水)

全道展

—70周年記念展 受賞者による—

第5回新鋭展

2015年10月29日(木)～11月3日(火)

大同ギャラリー

札幌市中央区北3条西3丁目1

札幌大同生命ビル3・4階

011-241-8223

オープニングパーティー

10月29日(木)18:00～

● 編集後記 ●

人間の年齢で数えて70歳、古稀を迎えた全道展。交流紙も50号発行を機にロゴを一新してのお目見えとなった。情報発信紙としての側面を持つZENが、より有益な冊子であるために欠かせないのが寄稿者の協力だ。今回も多くの方に助けられた。感謝の二文字あるのみです。

〈清野、澁谷、米澤(文責)〉